

チベット絵画で使われる色材とその混色例 —デゥマルゲシエの色材知識(ベージュとアイボリー)—

小野田 俊蔵

18世紀後半にチベットで活躍した僧侶であり、また医師でもあり美術評論家でもあったデゥマルゲシエ・テンジンプンツォク・ペルサンポ *De'u dmar dge bshes bstan 'dzin phun tshogs dpal bzang po* は、チベット宗教絵画における様式の変遷に関する興味ある書物を著していることで有名だが、絵画の実際の技法にも詳しい知識を持っていた。特に色材に関しては、薬材と共通する物質が多いことも原因してか、その知識は精緻を極める。本稿は前稿(『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第8号)に引き続き、彼が説明する基礎色材の分類やそれらを使った混色の技法の幾つかを紹介し、その概要を明らかにすることを目的とする。

デゥマルゲシエ・テンジンプンツォクは、1700年代の前半(1725年或いは1727年)にカム地方のコジョ *Go 'jo* の北西にあるセルガー *gSer dga'* (或いはセルカル *gSer khar*) の地で生まれた人物である⁽¹⁾。著名な医師を多く生み出したビジ *Bi ji* の家のドルジェタシ *Do rje bkra shis* なる医師を父として生まれ、その父や叔父に薫陶を受けて育ち、成長して後には薬学や薬草学などの幅広い分野に広い教養を持つ学者となった。薬草や動物そして鉱物に関する博物学的知識が彼の多岐に渡る博識の基礎的な学問地盤であったという。仏教絵画特に諸尊の図様については12歳の時に就いた得度の師シャーキャラワン *Shākya lha dbang* から手ほどきを受けたようだ。さらに薬学上の師の一人には、*bShad pa'i rgyud kyi sbyor bas sman gyi 'grel pa 'bru 'grel mun sel sgron me sman ngos 'dzin pa'i zab chen drang srong dgyes pa'i snying thig* という薬学書を残している医師ナムカイツェン *Nam mkha'i mtshan can* がいる。

青年期の彼はジョムダー *'Jo mda'* 地区のジガル *rDzi dgar* 僧院で修行僧をしていたという。そこでの師僧は、カルマテンベル *Karma bstan 'phel*

とクンガーテンジン *Kun dga' bstan 'dzin* (*Khams sprul*, 1680-1728) であった。勤めによって少年時代には中央チベットに行き、ゲルク派のセラ僧院での基礎修行の経験もあるという。その後ツルプのカルマ派僧院で暦学等の研究をした後、故郷に帰って後は医者として活躍し、その名声は雲南にまで広まったという。師クンガーテンジンの没後、彼はインドへの巡礼に旅立ち、ブッダガヤで師の追善を勤めた後、インドで引き続き薬学の研修に努めた。チベットに帰った彼は、トゥールンヤナムツォあるいはドカムの諸地方から請われて転々としながら地方の医療に従事する傍ら、後述する多くの薬学書を著述していった。

彼が後に住持をしたのは、彼自身が故郷の近くに創建したデウマル・サブギェチューリン *De'u dmar Zab rgyas chos gling* という寺であった。この寺は後にコキムゴンパ *mKho khyim dgon pa* と呼ばれる小さな僧院となっている。彼の薬学での主たる弟子の中にはシツパンチェン *Si tu pañ chen* (1700-1774) やカムトウル・テンジンチュエーキニンマ *Khams sprul bsTan 'dzin chos kyi nyi ma* (1730年誕生) そして著名な画家であるザトウー・ラチェンパ・ダルママンガラム *rDza stod* [或いは *rJe stod/ rGyes stod?*] *Lha chen pa Dharma manggalam* (*Chos bkra shis*) などが含まれる。

デウマルゲシェが著述した薬学書の中で今日確認されているものとしては次の八書がある⁽²⁾。

- 1) *Lag len gces bsdu sman kun bcud du sgrub pa'i las kyi cho ga kun gsal snang mdzod*
- 2) *gZo rig skor gyi ming tshig nyer mkho'i don gsal*
- 3) *sNa tshogs man ngag nyer lnga brgya rtsa 'chi med bdud rtsi shel dkar phreng ba mkhas mang yongs kyi mgul rgyan*
- 4) *Rig pa bzo'i gnas kyi las tshogs phran tshig [tshogs] 'dod dgur bsgyur ba'i pra phab 'od kyi snang brnyan bi shwa ngal bso*
- 5) *Zhu rjes gsum gyi ngo sprod gsal ston me long*
- 6) *sMan gyi ro nus zhu rjes sbyar thabs kyi rdel 'grel rgyud don rab gsal*

- 7) *Bi sha bcod pa'i man ngag tsinta ma ni*
8) *bDud nad gzhom pa'i gnyen po rtsi sman gyi nus pa rkyang bshad gsal ston dri med shel gong*

更に、前述したように、デウマルゲシェは美術評論書や絵画技法書も著している。代表的なものは次の二書である⁽³⁾。

- 9) *Kun gsal tshon gyi las rim me tog mdangs ster 'ja' 'od 'bum byin*
10) *Rab gnas kyi rgyas bshad 'jam mgon dgyes pa'i bzhad gad phun tshogs bkra shis cha brgyad*

デウマルゲシェが1730年代に著したであろうと考えられている上記9の美術理論書『クンセルツンギレリム*Kun gsal tshon gyi las rim*』の第8章には159色の複合色の混色法が説明されている。その混色法の幾らかは他の数名の著者による断片的な記述と共通する部分も存在するが、異なる方法もあるので、それらと比較しながら考察を進めたい。比較しうる絵画理論書とは、ポトンパンチェン・チョクレーナムギエル*Bo dong pañ chen Phyogs las rnam rgyal* (1375-1451)、ミパムギャムツォ*Mi pham rgya mtsho* (1846-1912)そして、ロンタ・ロプサンギャムツォ*Rong tha Blo bzang rgya mtsho* (1863-1917)によるもの等である。

基本色材に関するデウマルゲシェの知識

デウマルゲシェの混色理論を検討する前に先ず基本的な色材についての知識を概述しておきたい。デウマルゲシェが基本色材と理解していたものは同書『クンセルツンギレリム』の第1章から第3章に記述されている。

分類学に堪能な彼の特徴は色材の素材(*mtshon gyi rgyu*)による区分法を語る第1章の記述によく現れている。彼は色材を素材という観点から、土性色材*sa tshon*・岩性色材*rdo tshon*・水性色材*chu tshon*・火性色材*me tshon*・樹木色材*shing tshon*・草木色材*ldum tshon*・花性色材*me tog tshon*・骨性色材*rus tshon*・宝石色材*rin chen tshon*に分類する。原文での表現では、

dang po mtshon gyi rgyu bstan pa//sa rdo chu me shing ldum

dang//me tog rus pa rin po che//rigs dgur 'dus tshang...//

[MS1:p.2-8 ; MS2:p.5-3]

最初に色の原素材を示すと、土、石、水、火、木、草そして、花、骨、宝石、これら九種に纏められる。

九種に分類される色材の各々の例として、デゥマルゲシェは以下の様に色材名を列記している。[MS1:p.2-10~p.3-6 ; MS2:p.5-4~p.6-4]

土性色材

*lho bun ka rag sra ne dang//bab la sdong rol mu ljang btsag//
tshon ram lcags ram sa tshon yin//*

鹹土(天然ソーダ)⁽⁴⁾、白土⁽⁵⁾、金剛土⁽⁶⁾、砒石雌黄土⁽⁷⁾、雄黄土⁽⁸⁾、緑色青金石土⁽⁹⁾、弁柄⁽¹⁰⁾、天藍土、鉄天藍土 [など] が土性色材である。

岩性色材

*so brag lha zho ra ga dang//lhang 'tsher mthing spang mtshal
mdun rtse//sbal rgyab smug yugs rdo tshon yin//*

歯状岩⁽¹¹⁾、硬石膏⁽¹²⁾、黄銅鉍⁽¹³⁾、雲母⁽¹⁴⁾、藍銅鉍⁽¹⁵⁾、孔雀石⁽¹⁶⁾、朱砂⁽¹⁷⁾、紫石英⁽¹⁸⁾、亀甲石⁽¹⁹⁾、紫玉石⁽²⁰⁾ [など] が岩性色材である。

水性色材

*li khri sindhu ra mthing ram//chu yi tshon yin bla mas
gsungs//*

黄丹⁽²¹⁾、シンドウラ⁽²²⁾、藍銅鉍 [など] は水性色材で [も] あると師が仰った。

火性色材

*snag tsha bab sdong dud pa gsum//me las byung phyir me
tshon zer//*

墨⁽²³⁾、砒石雌雄黄、烟膏⁽²⁴⁾の三種は、火から生じるので火性色材であると言われる。

樹木色材

チベット絵画で使われる色材とその混色例

*dmар shing gser shing sra shing gsum//rgya skyegs tshon ram
shing tshon yin//*

紅樹(シタン)、金樹、硬樹の三種⁽²⁵⁾と、臙脂⁽²⁶⁾、木藍⁽²⁷⁾[など]
が樹木色材である。

草木色材

*skyes bu shing dang khrag rkang pa//rgya sne rnams ni ldum
gyis tshon//*

月見草、鴨嘴花草⁽²⁸⁾、葉ケイトウ⁽²⁹⁾などは、草木色材である。

花性色材

gur gum gro ga utpala ser//shang dril la sogs me tog mangs//
紅花⁽³⁰⁾、樺(かば)⁽³¹⁾、芥子(けし)⁽³²⁾、桜草⁽³³⁾などは、花性色材
である。

骨性色材

dung dang 'brug rus rus pa'i tshon//

法螺貝⁽³⁴⁾と龍骨(化石骨)は骨性色材である。

宝石色材

*gser dngul zangs rag gser 'gyur gsha' [MS2:sha]//dngul chu
dang ni sa rtsi rnams//rin po che'i tshon yin no//*

金⁽³⁵⁾、銀⁽³⁶⁾、青銅⁽³⁷⁾、黄銅⁽³⁸⁾、錫⁽³⁹⁾、水銀⁽⁴⁰⁾、銅鏽⁽⁴¹⁾などは
宝石色材であるのだ。

デュマルゲシェはそれら色材の一部を基本色と看做し、それらを配合す
ることによって望みの支分色を作り出すことが出来ると考えていた。

*gnyis pa tshon gyi grangs bshad pa//rtsa ba yan lag gnyis
[MS2: gnyis gnyis] yin te//rtsa ba dkar ser dmar sngo ljang//
nag po dang ni drug yin te//'di las ma sbyar mdog med
kyang//rang byung ngur smrig li khri dang//smug po dang
bcas brgyad yod ces//'dod pa mang ba shes par mdzod//
yan lag bye brag mang ba rnams//'khrul 'khor sdeb pa 'og tu
gsal// [MS1:p.3-6~p.3-11 ; MS2:p.6-4~p.7-1]*

色彩の種別を説明すると、基本色と支分色とに二分出来る。基本色には、白色、黄色、赤色、青色、緑色、そして黒色の六色があって、これらから配合出来ない色は存在しないが、[それらに加え]天然で褐色を呈する橙色と紫色を合わせて八(原色)あるとも言われ、より多くの望みの色を[それらから]配合し得ると知られている。詳しい方法は後述する。

そして、デウマルゲシェは第1章で提示した素材種別の分類支を同書第3章では、基本色としての八色の下に再区分する。

[MS1:p.3-11～p.48；MS2:p.7-2～p.8-2]

lho bun ska rag sra ne dang//so brag dung dang lha zho dang//lhang tsher dngul zil ra ga rnam//dkar po'i mtshon rigs yin par bshad//

鹹土、白土、金剛土と、齒状岩、法螺貝、硬石膏と、雲母、陽起石⁽⁴²⁾、黄銅鉍などは、白色色材であるとされる。

bab la sdong ros skyes bu shing//khrag rkang gser shing gur gum dang//utpala ser dang hu ljang dang//gro ga ghi (MS1: ghing) wangs (MS1: om.) ser po'i mtshon//

砒石雌黄、雄黄、月見草、鴨嘴花草、金樹、紅花、芥子、湖緑⁽⁴³⁾、樺、牛黄⁽⁴⁴⁾などは、黄色色材であるとされる。

mtshal rigs da chu lcog la ma (SRCT: mo) //lho mtshal shag mtshal phal mtshal dang//dmar shing rgya sne rgya skag rnam//dmar po'i rigs su bshad pa yin//

朱の類いの朱銀、辰砂⁽⁴⁵⁾、南朱、砂朱、普通朱[など]と、紅樹、葉ケイトウ、臘脂などは、赤色色材とされているのである。

mthing dang ram rigs sra shing rnam//sngon po'i rigs su shes par bya//

藍銅鉍、木藍、硬樹などは、青色色材の類として知られている。

spang dang mu ljang ljang gu'i tshon//

孔雀石と青金石は、緑の色材である。

me dreg sol rdo nag po'i rigs//

燃焦(コケ)⁽⁴⁶⁾と煤石は黒の類である。

li khri sindhu ra ngur smrig//

黄丹、シンドウラは、橙色。

sbal rgyab mdung rtse smug zil dang//yugs rnams smug po'i rigs su bshad//

亀甲石、紫石英、紫代赭石、紫玉石などは、紫色の類とされる。

rgya skyeg dang ni mar shing gnyis//dmar po'i nang nas smug por gtogs//

臙脂とそして紅樹の二つは、赤色の中でも紫 [がかった色] と看做されている。

ほとんどの天然鉱色粒は基本的には相互に混入可能だが、いくつかの組み合わせは化学変化を誘発して、或いは比重の差によって良い結果を産むことができないと言い伝えられている⁽⁴⁷⁾。つまり、鉱物色材間の混色は細心の注意を払って行なわれてきた。混色法理論は絵師の間では常に重大な関心事であったのだ。

デュマルゲシェのアイボリーとベージュ

さて前稿では、肌色あるいは茶色ときには桃色と日本語で称され得る一群の色がどのような混色理論のもとに作られるのか、という問題を扱った。英語では *brown* ブラウンあるいは *pink* ピンクと称される色にほぼあたる。これらの色は例えばタントラ画における成就者の肌色や臓物の色として多用される色である。チベット絵画の世界ではこれらの色は大きく分けて二種の作られ方をする。つまり臙脂と白土を混ぜて作られる場合と、朱と白土を混ぜて作られる場合とである。

改まって本稿では灰色と称され得る一群の色がどのような混色理論のもとに作られるのか、という問題を扱う。英語ではアイボリー *ivory* あるいはベージュ *beige* と称される色にほぼあたる。この系統の色はタンカ(軸装

仏画)画面上では雲や骨などの表現で頻繁に使用される色であるが、専門的な知識と経験がなければ一見ただけでは相互の識別さえ難しいものである。

アイボリー (骨色)とその派生色

先ずデゥマルゲシエが解説する「骨色」の作り方を見てみよう。

dkar la bab la chung zad bsre/

dkar ser rus kha zhes bya 'byung/

'brug rus 'dul la'ang rus kha (MS1:ad. rig chig ; MS2:ad. rigs gcig) *'byung//* [MS1:p.23-12 ; MS2:p.32-4 ; SRCT:113-25]

白土に石黄がほんの少し混ざると

黄白のルーカ(*rus kha* = 骨色)と言われる色が出る。

龍骨を粉碎精製しても骨色は出来る。

rus kha snga mar myong (MS1/SRCT: myang) *rtsi sprad/*
cung bsres dkar ser dar ba'i mar/

gsar (MS2: *gsar*) *'dra mar gsar mdog ces 'byung/*

前述のルーカ(骨色)に黄蓮(キンポウゲ)⁽⁴⁸⁾を

少し混ぜると、黄色を帯びた白色のバターの色と称される

黄金の様に [美しい] 出来立てのマル(*mar* = バター色)が出る。

mar mdog de la rgya tshos mdog/

gyur (MS1/SRCT: *'gyur*) *tsam bsres pa ba so kha/*

mar gsar kha la ram (MS1/SRCT: *rams*) *cung zad/*

bsres pa dkar ljang sa lu kha/

そのマル(バター色)に臘脂をほんの少し

混ぜるとバソカ(*ba so kha* = 象牙色)が出る。

マル(バター色)にインディゴ(木藍)を少し

混ぜると白緑のサルカ(*sa lu kha* = 朮米色)が出る。

dkar la mtshal skya (MS1&2: *skya'i kha bun dang/*
mu zi ser po) *cung zad bsnan/*
de dang ser po cha mnyam par/
se mi kha zhes (SRCT: *ces*) *gser mdog 'byung* (SRCT: *'gyur*) /
ming gzhan ngang pa gser ldan zhes/

白に薄朱を少しと [MS1&2僅かの硫黄] を混ぜて

それに黄色(雄黄)を同量混ぜると

セミカ(*se mi kha* = 刺梅花色)と呼ばれる色が出来る。

これは別名で黄金色のガンパ(*ngang pa* = 鶯鳥色)とも呼ばれる。

ロンタ *Rong tha Blo bzang dam chos rgya mtsho* (1863-1917)はこのガンパ(鶯鳥色)という色名を採用し、デウマルゲシエとほぼ同じ混色方法を記述している。

dkar la mtshal skya bsres pa dang//
ser po cha mnyam ngang pa 'byung// [Rong tha : 183]
白に薄朱を混ぜ、そして
黄を等量加えるとガンパ(*ngang pa* = 鶯鳥色)が生ずる。

デウマルゲシエの記述に戻ろう。デウマルゲシエはこのセミカ色の説明に続けて、

de la li khri cung zad bsnan/
dmar ser gu lang gser 'dra 'byung/
それ [=セミカ色] に黄丹を少し混ぜると
赤黄色の黄金のようなグラン(*gu lang* = 自在天色) が出る
と説明するが、この色はロンタの説明ではセルンダ(*gser 'dra* = 似金色)
と呼ばれる色に相当する。

ngang pa de la li bsnan gser 'dra//
そのガンパ(鶯鳥色)にリティを加えると
セルンダ(*gser 'dra* = 似金色)になる。

デゥマルゲシエは同じく硫黄を使って象色と呼ばれる色も造る。

dkar la mthing skya'i kha bun dang/

mu zi ser po cung zad bsre/

de la glang chen kha dog zer/

白に薄めた群青を僅かと

少しの硫黄⁽⁴⁹⁾を混ぜる

それをランチェンカ (*glang chen kha* = 象色)と呼ぶ。

乳色と雲色

二種の青(群青と染料藍)を白土に微量混ぜて造る薄い青は乳色と呼ばれることがある。デゥマルゲシエの説明では、

dkar dang mtshon (MS1&2/SRCT:*mdangs shon*)

ram (SRCT: *rams*) *sbyar mang nyung/khyad las*

(MS1/SRCT: *par sa*) *sbyar mthing* (MS2: *ad. mthing*)

nag dang/mthing skya 'o ma kha gsum 'byung/

白と染料藍を混ぜるその加減によって

各々ジャルティンナク (*sbyar mthing nag* = 濃混合青)と

ジャルティンキャ (*sbyar mthing skya* = 淡混合青)と

オマカ (*'o ma kha* = ミルク色)との三種が生じる

de bzhin dkar la mthing skya bsre/

'o kha 'o sngon 'o shang kha/

chu yi rlong (MS1/SRCT: *rlangs*) *smug sprin kha zer/*

同じように白に淡群青を混ぜていけば

オカ (*'o kha* = 乳色)、オゴン (*'o sngon* = 青乳色) [そして]

オシャンカ (*'o shang kha*) が出来るが、[これは]

霞掛かった雲色と呼ばれる。

dkar la spang skya bsres pa na/

dkar ljang sprin chen kha zhes zer/

白に淡緑青を混ぜると

白緑のティンチェンカ (*sprin chen kha* = 大雲色) と呼ばれる。

de la sngo skya 'o kha bsnan/

g-yu sprin kha zhes bya ba 'byung/

それに淡群青色であるオカ(乳色)を混ぜると

ユティンカ (*g-yu sprin kha* = 玉雲色) と呼ばれる色が出る。

sprin chen kha la bab la bsnan/

de la sprin ser 'byung ba dang/

yang na li khri bsnan ser bsnun (SRCT: *snum*) /

ティンチェンカ (大雲色) に石黄を混ぜると

その場合はティンセル (*sprin ser* = 黄雲色) が出るし

或いは黄丹を混ぜるとセルヌン (*ser bsnun* = 倍黄色?) となる。

ロンタ *Rong tha Blo bzang dam chos rgya mtsho* (1863-1917) はこの乳色系統の色に関して微妙にデゥマルゲシェとは異なる別の混色方法を記述している。[Rong tha : 183]

dkar la mthing chu bsres 'o dkar/

de las cher bsres 'o sngon zer//

白に群青を希釈したもの (*mthing chu*) を微量混ぜるとオカル(白乳色 *'o dkar*) が出る。

それより [群青の度合いを] 増やすと青味がかかった乳色オゴン(青乳色 = *'o sngon*) と呼ばれる色である。

dkar la spang chu bsres 'o kha//

de las cher bsres 'o ljang yin//

白に緑青を希釈したもの *spang chu* を微量混ぜるとオカ (*'o kha* = 乳色) が出る。それより [緑青の度合いを] 増やすとオジャン

(*'o ljang* = 緑乳色)である。

ロンタのオカ(乳色)の素材は緑青(マラカイト)と白土であり、群青(アズライト)と白土を用いるデゥマルゲシェの製作法とは明らかに異なっている。

灰色と茶色

デゥマルゲシェの『クンセルツングレリム』第8章の記述に戻ろう。デゥマルゲシェは灰色について次の様に記述する。[MS1:p.25-10 ; MS2:p.34-6 ; SRCT:p.114-17]

dkar por snag tsha'i g-ya' bsres la (SRCT: *pas*) /

thal ka (MS1/SRCT: *kha*) *zhes bya de la 'byung* /

白に墨の滴りを加えると

テルカ (*thal kha* = 灰色)と呼ばれるものがそこに出来る。

dkar shas che ba thal dkar te (MS2: *ste*) /

'di (SRCT: *'dir*) *yang glang chen kha zhes grags* /

nag che thal nag ser thal ser /

mtshal bun bsnan na thal dmar zer (SRCT: *ser*) /

sngo skya bsnan na thal sngon 'byung /

白が多めのものはテルカル (*thal dkar* = 白灰色)であり

黒が多めのものはテルナク (*thal nag* = 黒灰色)で

黄色を少し混ぜたなら、テルセル (*thal ser* = 黄灰色)である。

朱を少し混ぜたなら、テルマル (*thal dmar* = 赤灰色)と呼ばれ

淡群青を混ぜると、テルゴン (*thal sngon* = 青灰色)が出来る。

ロンタの説明を見てもほぼ同じ混色法と色名である。

dkar la snag bsres thal ka 'byung //

dkar shas che ba thal dkar dang //

de la mthing skya bsres thal sngon// [Rong tha : 183]

白に墨を加えるとテルカ (*thal kha* = 灰色) が出来る。

白が多めのものはテルカル (*thal dkar* = 白灰色) であり

それに淡群青を混ぜると、テルゴン (*thal sngon* = 青灰色) である。

次にテウマルゲシェは茶色について次の様に記述する。

[MS1:p.27-3 ; MS2: p.36-7 ; SRCT: p.115-5]

mtshal (MS1&2: *tshal*) *skya rgya snag* (MS1&2: *nag*) *cha mnyam la/*

bab la cung zad bsnan pa la/

ja kha zhes bya de gsum po/

cha la dpag nas

de gsum po (SRCT: *mo*) /

cha la dpag nas (SRCT: om. *de gsum po/cha la dpag nas*)

ja dmar dang/

ja nag ja ser gsum du bya/

薄朱に中国の墨を少し混ぜ、それに

黄丹を少量混ぜたものは

チャカ (*ja kha* = 茶色) と呼ばれ、

混合量の度合いによって三種類がある。その三種とは、

チャマル (*ja dmar* = 赤茶) とチャナク (*ja nag* = 黒茶) とチャセル

(*ja ser* = 黄茶) と呼ばれる。

ja mkhar (SRCT: *khar*) *skag mnan* (SRCT: *bsnan*)

ja smug dang (SRCT: *'byung*) /

sbyar ljang bsnan na ja ljang 'byung/

チャカ (茶色) に臙脂を混ぜると、チャムク (*ja smug* = 紫茶) となり、混合緑を混ぜると、チャジャン (*ja ljang* = 茶緑) が出来る。

ja khar smug pos (SRCT: *po*) *sbal rgyab bsnan/*

de la'ang ja smug rigs (MS2:rig) *gcig 'byung/*
チャカ(茶色)に亀甲石を混ぜても
チャムク(紫茶)の一種が出来る。

ロンタもほぼ同じ方法で茶色を説明している。

dkar steng mtshal skya ba bla dang//
snag gsum bsnan pas ja kha zer//
dmar shas che ba ja dmar zer// [Rong tha : 183]
白の上に薄朱と雌黄と
墨の三つを加えると茶色 *ja kha* が出来る。
朱が多めであれば、赤茶色 *ja dmar* と呼ばれる。

陶器色と煙色

さて、ページュという英語の表現は時としてブラウン掛かったねずみ色
を指す場合もある。英語表現でもフレンチページュと呼ばれる色である。
この色に近いものがデウマルゲシエの説明中でも登場する。rdza kha 陶
器色と呼ばれる色である。

sdong ros nang du dmar skya dang/
snag tsha zhad tsam re (SRCT: re om.)
bsnan (SRCT: *bsnan byas*) *pas/*
rdza kha zhes bya de la yang/
dkar po cung bsnan rdza skya yin/
rdza kha dmar shas che ba'i nang/
snag tsha cung zad shed (SRCT: *shas*)
bksyed dar (MS2: *par* SRCT: *pas*) /
dud kha zhes zer (SRCT: *bya*) *de la yang/*
sngo skya bsnan na dud (SRCT: *du*) *sngon 'byung/*
雄黄土の中に薄朱と

墨を少し混ぜることによって

ザカ (*rdza kha* = 陶器色) と呼ばれる色が出来るが、そこに白土を少し混ぜるとザキャ (*rdza skya* = 薄陶器色) である。朱を少し濃いめにした陶器色に墨を更に少し加えるとドウカ (*dud kha* = 煙色) と呼ばれる色が出来る。さらにそれに薄群青を混ぜたならドウゴン (*dud sngon* = 青煙色) が出来る。

ロンタは全く異なる素材を使って煙色を造る。

ja dmar snag bsres dud kha 'ong// [Rong tha : 183]

赤茶色に墨を混ぜると、煙色 *dud kha* が生じる。

つまりロンタの煙色には、素材として雄黄 (= リアルガー) ではなく雌黄 (= オーピメント) が入っていることになる。

註記

- (1) 伝記に関しては、SRCT青海版に添えられた略伝 (pp.3-5) 及び Jackson, D. 1996, p.45 の記述に依った。
- (2) 藏薬本草 p.397 参照。
- (3) Jackson 1996, p.45.
- (4) *lho bun* = *lho'i bul tog* と解する。*bul tog* は、藏薬本草 p.90 ; 四部医典 p.196 土類薬の6番にある「天然ソーダ (Eng: *trona*)」。
- (5) *ka rag* = *kar* と呼ばれる。天然の白亜土 (Eng: *earth white*) 炭酸カルシウムを主成分とし、*pho kar* (雄白土) と *mo kar* (雌白土) がある。Jackson p.82 ; 藏薬本草 p.65 の *rdo thal* (石灰岩) の項目参照。
- (6) *sra ne* は羅秉芬によれば金剛土とされる。金剛土は炭化ケイ素土とも呼ばれる。Luo Bingfeng 1997, p.40.
- (7) *ba bla* は砒石土の内、雌に分類されるもので、*Auripimentum* (Eng: *orpiment* オーピメント) のこと。ヒ素の酸化物、強烈な黄色を呈する。Jackson p.81 ; 藏薬本草 p.70 ; 四部医典 p.192 (112).
- (8) *sdong ros* (*ldong ros/rol* と綴られる) は砒石土の内、雄に分類されるもので、リアルガー (Eng: *realgar*) 鶏冠石土のこと。Jackson p.82 ; 藏薬本草 p.67 ; 四部医典 p.192 (111).

- (9) *mu ljang*は羅秉芬によれば「綠色青金石」とされる。Luo Bingfeng 1997, p.40; 138; 青金石*mu men*については藏薬本草p.33及び四部医典p.190 (62) 参照。
- (10) *btsag* (弁柄べんがら)は別名で赤石脂(紅土) *Laberitum*。黄土と同じく泥状のリモナイト鉱つまり水酸化第二鉄であるが、弁柄のほうには含水素物質が欠けている点が異なるとされる。弁柄という名は産地のベンガル地方に由来している。Jackson p.82; 藏薬本草p.74; 四部医典p.192 (122)。
- (11) *so brag*については不明; 羅秉芬は菌状岩と漢語訳している。Luo Bingfeng 1997, p.41/149。
- (12) *lha zho*とは *gangs thigs*高山風化硬石膏の別名。水に溶けるとヨーグルト*zho*のようになることから「神のヨーグルト*lha zho*」と呼ばれる。藏薬本草p.55。
- (13) *ra ga*を *ra gan* (宝石色材の項目では *rag* と記述している)と解する。*ra gan*は黄銅 *Aurichalcum* (Eng: *brass*)。これにも *pho rag* (雄黄銅)と *mo rag* (雌黄銅)があると説明される: 藏薬本草p.48。
- (14) *lhang 'tsher*とは雲母 *Muscovitum*のこと。黒色のものは *lhang 'tsher nag po*と呼ばれる。藏薬本草p.83。
- (15) *mthing* (藍銅鉱 = *rdo mthing*)は岩群青の材料であるアズライト(Eng: *azurite*)鉱は塩基性炭酸銅を主成分とする。粒子の大きさによって呈する色が異なり、最も小さな粒は高明度で *sngo si* (白群)以下粒子が粗くなるにつれて明度が低くなり *sngo sang* (群青淡口) *mthing shul* (群青標準色) *mthing 'bru* (群青濃口)と呼ばれる。Jackson p.75; 藏薬本草p.62; 四部医典p.228 (18)。
- (16) *spang* (孔雀石 = *rdo spang*)は岩緑青の材料。マラカイト(Eng: *malachite*)炭酸銅と水酸化銅の混合物。群青と同じく粒子の大きさによって呈する色が異なり、最も小さな粒は高明度で *spang si* (白緑)以下粒子が粗くなるにつれて明度が低くなり *spang skya* (緑青淡口) *spang* (緑青標準色) *spang smug* (緑青濃口)と呼ばれる。Jackson p.78; 藏薬本草p.68; 四部医典 p.228 (17)。
- (17) *mtshal* は天然鉱の硫化水銀。ヴァーミリオン(Eng: *vermilion*)銀朱のこと。Jackson p.80; 藏薬本草p.75; 四部医典p.191 (98)。
- (18) *mdun rtse = smug po chig thub*とも呼ばれる針鉄砒 *Goethitum*: 藏薬本草p.73; 四部医典p.190 (75)。
- (19) *sbal rgyab*には *smug po sbal rgyab* 紫亀甲石 *Hematitum*(藏薬本草 p.74)

チベット絵画で使われる色材とその混色例

と *dkar po sbal rgyab* 白亀甲石(蔵薬本草 p.54)があり、前者はさらに *pho sbal* 雄亀甲石と *mo sbal* 雌亀甲石とに分けられる。

- (20) *smug yugs* 紫玉石は結核状赤鉄鉱とも呼ばれる：蔵薬本草 p.77.
- (21) *li khri* は鉛丹とも呼ばれミニウム(Eng: *minium*)のこと。鉛の鉱床が酸化したもの。Jackson p.81；蔵薬本草p.75.
- (22) リティ (ミニウム)のサンスクリット名が *shindhura* であるが、チベットの学者達はこれらを区別する。シンドウラはリティよりも黒っぽく褐色を帯びたもので湖のほとりなどで堆積したものだと説明される。Jackson p.81；薬学では禹余糧と呼ばれ四部医典では土類薬の2番目として説明される。四部医典p.196.
- (23) *snag tsha* は墨一般の名称。カラマツの木質や樺皮などを燃焼させて作る。墨の製造法に関するミパムによるかなり詳しい説明がJackson p.89 (邦訳のpp.89-90)に引用されている。
- (24) *dud pa = dud dreg* 烟膏は五行丹とも呼ばれる煤墨のこと：蔵薬本草 p.124.
- (25) この三種の木についての詳細は不明。紅樹は紫檀をさすものと思われるが、金樹は *skyu ru ra* 余甘子：查(さんざし)の異名とも言われる；蔵薬本草 p.116.
- (26) *rgya skyeg* は *rgya tshos* とも呼ばれ臘脂のこと。ラックカイガラムシ (*laccifer lacca*) が分泌する脂から採集される色材料。Jackson p.113；蔵薬本草p.123.
- (27) *tshon ram* は単に *ram* (時として *rams*) とも呼ばれ木藍インティゴ(Eng: *indigo*) のこと。まめ科コマツナギ属 *indigofera* から作られる染料色材。Jackson p.112；蔵薬本草p.77.
- (28) *gur gum* は蔵紅花とも呼ばれるサフランの一種。 *Crocus sativus*：蔵薬本草p.100；四部医典p.197 (37).
- (29) *gro ga* は樺の木。灰にすると薬剤にもなる：四部医典p.236 (76).
- (30) *khrag rkang pa* は *ba sha ka* とも呼ばれる鴨嘴花草 *Adhatoda vasica* Nees：蔵薬本草p.141；四部医典p.206 (60/61).
- (31) *utpala* は芥子(けし)：蔵薬本草p.321には三種：*utpala / utpala dmar po / utpala ser po*；四部医典p.194 (44)には四種の例図がある。
- (32) *shang dril* は報春花とも呼ばれる草花の一種。 *Primuia sikkimensis*：蔵薬本草p.297；*shang dril dmar po / shang dril smug chen / shang dril smug chung* 等の別がある。

- (33) *rgya sne* は葉鶏頭 *Amaranthus caudatus* L. : 蔵薬本草p.226.
- (34) *dung*とは海螺 *Rapana bezoar* (Linnaeus)の一種で、*gzi dung* 法螺貝をさす場合が多い。色合いによって*dung dmar*赤法螺貝や*dung dkar*白法螺貝の呼び名がある：蔵薬本草p.21.
- (35) *gser* 金は金泥の状態では色材にされるが、その精製法に関してはJackson p.112に詳しい；蔵薬本草p.21；四部医典p.191 (91).
- (36) *dngul*は銀 *Argentum* (Eng. *Silver*) : 蔵薬本草p.40；四部医典p.191 (92).
- (37) *zangs*は青銅 *Cuprum* (Eng. *Copper*) : 蔵薬本草p.47；四部医典p.189 (33).
- (38) *rag* については註⑬参照。
- (39) *gser 'gyur gsha'*とは*gsha' dkar* 錫 *Cassiteritum* : 蔵薬本草p.50；四部医典 p.192 (110).
- (40) *dngul chu*とは水銀のこと：蔵薬本草p.21；四部医典 p.236 (67).
- (41) *sa rtsi*は*sag rtsi*とも綴られる。或いは、*sa ram rtsi*と称され「銅銹」と訳される。Luo Bingfeng 1997, p.41；148；四部医典p.228 (15).
- (42) *dngul zil* 陽起石(玄精石) *Actionolitum*。カルシウムやマグネシウムや鉄分を含む岩性のもので、主としてインドで産出される。石綿(アスベスト)状のもの*Actinolite asbestius*もあるという。蔵薬本草p.58；四部医典p.191 (95).
- (43) *hu ljang*に関しては不明。羅秉芬は*hu*を漢語と解し「湖」に当てて解釈している。Luo Bingfeng 1997, 150
- (44) *ghi wangs* 牛黄。動物の体内に蓄積する結石。蔵薬本草p.58, 四部医典p.250 (3)；結石類は薬(解熱剤)として用いられるが、動物の種類によって色も処方も異なる。四部医典には牛だけではなく、象や猪等の結石を薬材として別記している。四部医典p.197(29-31)；色別に結石を分類する方法もあり様々な色の結石を補助薬物(解毒剤)として四部医典では列記している。四部医典p.240 (16-30)；尚、羅秉芬は*gro ga ghi wangs*を一語と解して樺樹皮と訳している。Luo Bingfeng 1997, 41.
- (45) *da chu*と呼ばれたり*lcog la ma/mo*と呼ばれたりする辰砂シンナバー(Eng. *cinnabar*)は朱銀と同じく硫化水銀(*Hdragyrum Sulphidum*)であるが、早い時代から人工で合成して作られてきた：Jackson p.80；蔵薬本草p.58；四部医典p.237 (78).
- (46) *me dreg*と総称される燃焦(コゲ)は*phru dreg* 鍋底墨と*slang dreg* 百草墨そして*dud dreg* 烟膏などの別があるという：蔵薬本草 p.124.
- (47) 例えば、ミバムギャムツォ*Mi pham rgya mtsho* (1846-1912)は、次のよ

うに説明している。

ljang gu dang ba bla 'dres na tshon rul ba ste mi legs/ gcig gi steng du gcig phog na yang nag por 'gro/ li khri mang po la mtshal nyung du btak kyang rul ba sogs shes par bya'o// [Mi pham : 86]

岩緑青（マラカイト）と雌黄（オーピメント）が混合された場合、化学変化が起こって、よい色にはならない。その一方が他方に添加されても黒くなる。また、ほんのわずかの朱（水銀朱＝ヴァーミリオン）が混じるだけで、多量の橙（赤色酸化鉛＝鉛丹＝ミニウム）でも暗変して損なわれる

- (48) *myang rtsi sprad* 或いは *myang rtsi spras* 黄蓮 *Coptis teetoides C. Y. cheng*. 味蓮・雅蓮・野蓮の別があるという。蔵薬本草p.264；チベットで採取される黄蓮は中国では胡黄蓮と呼ばれる。チベット医学では血病の治療薬として使われる。四部医典p.250 (18).
- (49) *mu zi ser po* 硫黄 *Sulphur nativum*、呈する色によって、白硫黄 *mu zi dkar po* 黄硫黄 *mu zi ser po* 緑硫黄 *mu zi ljang gu* 黒硫黄 *mu zi nag po* の別があると説明される。蔵薬本草p.72；四部医典p.196 (7)(8)(9).

略号

- (MS1) = De'u dmar dge bshes bstan 'dzin Phun tshogs. *Kun gsal tshon gyi las rim me tog mdangs ster ja' 'od 'bum byin*. 『クンセルツンギ・レリム』 pp.1-139 (羅秉芬女史からの提供を受けた「1981年書写」と記録のある手書きウメ体チベット語原文写し)
- (MS2) = De'u dmar dge bshes bstan 'dzin Phun tshogs. *Kun gsal tshon gyi las rim me tog mdangs ster ja' 'od 'bum 'byin*. 『クンセルツンギ・レリム』 pp.1-182. (Gene Smith氏からの提供を受けた近代のウチェン体チベット語ペチャ型写本) 書誌データの記載なし。
- (SRCT) = De'u dmar dge bshes bstan 'dzin Phun tshogs. *gSo rig gces btus rin chen phren ba*. 『ソリクチュエトウ・リンチェンテンワ』
- (蔵薬本草) = dGa' ba'i rdo rje 『蔵薬晶鏡本草 *'khrungs dpe dri med shel gyi me long*』(蔵文)民族出版社、北京、1995.
- (四部医典) = 王鏞(池上正治訳)『四部医典タンカ全集』平河出版社、1992.

チベット語原資料

De'u dmar dge bshes bstan 'dzin Phun tshogs, *Kun gsal tshon gyi las rim me tog mdzngs ster ja'od 'bum byin* (MS1 及び MS2) 共に書誌データなし。

-----, *gSo rig gces btus rin chen phren ba*, Mtsho sngon: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khan (青海民族出版社), 1993.

Bo dong Paṅ chen Phyogs las rnam rgyal (1375-1451), *Mkhas pa 'jug pa'i [sgo] bzo rig sku gsung thugs kyi rten bzhengs thsul bshad pa*. In his *Collected Works*. New Delhi: Tibet House, 1969, vol.2, 215-65. See also, vol. 9, 461-501.

Mi pham rgya mtsho (1846-1912), *Bzo gnas nyer mkho za ma tog*. In his *Collected Writings*. Gangtok: ed. Sonam Topgay Kazi, 1975, vol. 9, 71-138.

Rong tha Blo bzang dam chos rgya mtsho (1863-1917), *Thig gi lag len du ma gsal bar bshad pa bzo rig mdzes pa'i kha rgyan*. New Delhi: Byams-pa-chos-rgyal, n.d.

二次資料

Jackson, D. and J. Jackson, *Tibetan Thangka Painting*. London: Serindia, 1984; 『稿本チベット絵画の技法と素材』(邦訳:佛教大学アジア宗教文化情報研究所, 2008, 瀬戸敦朗・田上操・小野田俊蔵共訳)

Jackson, D. 1996. *A History of Tibetan Painting, The Great Tibetan Painters and Their Traditions*. Vien: Verlag Der Osterreichischen Akademie Der Wissenschaften, 1996; 『チベット絵画の歴史 —偉大な絵師たちの絵画様式とその伝統—』(邦訳:平河出版社, 2006, 瀬戸敦朗・田上操・小野田俊蔵共訳)

Luo Bingfeng (羅秉芬). 1997. 西藏佛教彩繪彩塑藝術. 中国藏學出版社.

Onoda (小野田俊蔵), "Some Inconsistencies of Colour Composition Techniques in Tibet." In *Impressions of Bhutan and Tibetan Art*, Tibetan Studies III. ed. John Ardussi & Henk Blezer, Brill, 133-38, 2002. (「チベット絵画に於ける異種のブラウン —デウムアルゲシエの混色理論—」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第8号, 2011, pp.11-23)

dGa' ba'i rdo rje 『葦葉晶鏡本草 *'khrungs dpe dri med shel gyi me long*』(藏文) 民族出版社, 北京, 1995.

王鐳(池上正治訳)『四部医典タンカ全集』平河出版社, 1992.

